京都大学 大学院教育学研究科／教育学部

No.19 2009.12

（目次）

● 巻頭言
大学が大学であるためには……副研究科長 辻本雅史……2
● 研究ノート
教員から……臨床心理実践学講座 教授 松木邦裕……3
……教育学講座 准教授 山名 淳……3
院生から……教育方法学講座 修士課程２年 大下卓司……4
● 社会人研究生から……比較教育政策学講座 研究生 小木 充……4
● グローバルCOE：事業仕分けと中間評価
……教育認知心理学講座 教授 拠点リーダー 子安増生……5
● 大学院教育改革支援プログラムから
……臨床心理実践学講座 教授 角野善宏……5
● 教育実践コラボレーション・センターから
……コラボレーション・センター関連 助教 赤沢真世……6
● 臨床教育実践研究センターから
……臨床実践指導学講座 教授 心理教育相談室室長 皆藤 章……6
● 事務室から……教務掛 佐々江万由美……7
● 図書室から……専門職員（図書掛長） 沼澤 博……7
● 留学生から……教育学講座 博士後期課程３年 ヤユツ・ナパイ……8
● 諸記録……8〜9
①入試結果 ②学位授与件数 ③人事異動 ④寄付金受入 ⑤科学研究費補助金
⑥オープンキャンパス2009開催
● 諸報
新任教員、事務員紹介……10

巻頭言

大学が大学であるためには

副研究科長　辻本雅史

いわゆる「事業仕分け」がメディアを賑わしてきた。「劇場型政治」の時代だと思わざるを得ない。その中で、学術に関わる予算の見直しや縮減が大いに気にかかる。あの乱暴に見えるパフォーマンスにも、一定の政治的意図があるにしても、その予算がどのように実効性があるか、合理的根拠がなければ切り捨てるという「切り捨て御免」だけは、御免被りたい。

学術や教育に関わることの多くは、その成果を定量的外形的には示しにくい。そもそも大学は、本来、成果を定量化しにくい性格のものである。理系学問のことは不案内のこととてさておき、ここでは文系学問に限って言おう。

近年、さまざまな専門職大学院が設置され、京都大学でも法科大学院や公共政策大学院など4つの専門職大学院の開設をみている。また教育の専門職大学院をもつ教育系大学も増えているようである。確かに専門職大学院は、一定の専門資格や職業に直結している分、成果が目に見えやすい。しかし専門職養成が大学の主要な使命であるとするなら、それは大学である必要はない。専門学校を高度化すれば事足り話である。つまり大学が大学であること、それは専門職や専門技能の教育だけにあるのではない。では大学の使命とは何か。突飛なようだが、私の専門の立場から、近世藩校を引き合いにして考えてみよう。

近世藩校は18世紀後半以降、広く普及した。幕藩制社会の動揺期、危機に立ち向かう人材養成がおもな目的であった。極度の財政難の中、幕府も藩も大金を支出して、学校を作った。遠回りでも、結局は教育が肝要だと知っていたのである。藩校では儒学が必修。儒学を排した藩校はついになかった。文明開化開始期でさえ、そうであった。儒学は要するに経書（中国古代の古典、四書五経）を読む学であり、その素読が前提である。素読とは子ども期に意味も分からないまま漢文の経書を丸ごと暗誦すること。以後、経書の意味を、漢文の注釈書をもとに学んでいく。これが儒学の学習。およそ目前の危機に即応するには無縁の、迂遠きわまりない学習である。この儒学が幕末・明治にも藩校から排されなかった。（福沢諭吉ら一部知識人は儒学を排撃したが、それは西洋学術導入に有効と認めた戦略的言説であったろう）。

迂遠な儒学がなぜ学びの中心に置かれたのか。経書には聖人の言が記され、それを素読した学生は、聖人の言語を身につけ、その深い思想的言語によってものを考え、人としての内面を作り、人間形成を遂げていた。こうして「（儒教的）主体」が確立された。儒学は問題を人間主体のあり方の次元でとらえる。たとえば藩の巨額な財政難も人々の奢侈の結果と見、黒船来港（外交危機）さえ、キリスト教を廻る人心レベルに問題を置き直してとらえようとした。それは今なら、客観的で構造的な認識を欠いた主観的精神主義と切って捨てられよう。しかし人は心情レベルにおいて突き動かされる。幕末維新の激動を生き抜いた志士の学問・思想の土壌（教養）は、まぎれもなく儒学、なかんづく心を問題化する朱子学・陽明学系儒学であった。それらは主体を基礎づける形而上学と世界観を備え、主観主義の陥穽を免れる論理を備えていた。儒学学習が、危機に毅然と立ち向かう人間主体形成につながることを、近世人は知っていた。これこそ「教養」教育ではないか。儒学が「教養教育」として機能していた点を、ここではとくに強調しておきたい。

明治以後、欧米型大学をその学問とともに導入した。欧米の大学は人文学なかでも哲学の伝統が「教養」となって大学を支えていた。日本もそれに倣い、それとともに儒学的教養を切り捨てた。人間とは何かを考え、人間主体形成を問題とする「教養」は、大学が大学であるための、譲れぬ「生命線」、そう私は考えている。現在の人文学がそれに応える内実を備えているかどうか、それはともかく、それさえ軽視するなら、私はそれを「大学」とはよびたくない。大学に恥じない「教養学」をいかに創り出すのか、それがいま問われていよう。その問いは、わが教育学の課題そのものでもある。こうした教養教育は、その成果を目に見える形で示すことなど、出来ようはずもない。しかしそこに大学のアイデンティティを持ち続けなければ、と事業仕分けを見ながら、思うこと切なるものがあった。

研究ノート

教員から

臨床心理実践学講座　教授　松木邦裕

こころを知る方法に精神分析があることを知って44年、その精神分析を本格的に学ぼうと打ち込み始めて33年の歳月が経ちました。しかし、未だその道遠しを実感しています。人のこころという謎は、そこに踏み込めば踏み込むほどにそれを知らないことを気づかせ、スフィンクスのように新たな謎を投げかけてきます。そして、かつてエディプスが答えた明快な解答を見出すことはほとんど困難であり、またエディプスに起こったように、解答を得ることが不幸の始まりなのかもしれません。

現在私は、ふたつの臨床課題に目を向けています。そして講座在籍中に、それらの課題への私なりの見解を提示できるよう精進したいと思っています。

ひとつは、人の不安の根源的体験としての「対象の不在」です。生まれ出た新生児の私たちは、必ずや誰か（すなわち、母親対象）を求めます。そうしないと、乳児の私たちは生きられません。しかしながら、求めたときに母親対象がただちに得られるとは限りません。むしろ対象の不在は必ず起こるのです。その対象の不在を私たちがどのように生きるのか。この課題が私たちの在り方、対象関係の持ち方を根本的に規定します。この人間理解の本質にかかわる課題の臨床探求を続けています。

もうひとつは、「転移過程」です。精神分析臨床において最も重要な概念は、転移です。この転移の本質をなすものは、転移そのものが内包する独自の展開プロセスであると私は考えています。転移は、面接者やクライエントの一方が作るというものではなく、両者と分析構造によって確立された分析の場に誕生し、インディペンデントに生きて進展していくものなのです。この転移過程を精密に解明していきたいと願っています。そして、これらの探求が京都大学の心理臨床実践に貢献するよう努める所存です。

教育学講座　准教授　山名　淳

教育哲学・教育思想史を専門としています。19・20世紀転換期における新教育運動の理論および実践が、私の主要な研究対象です。ただ、研究テーマとしてこれまでとりあげたことは、多岐に渡ります。そのように表現すれば多少は聞こえがよいのですが、「あれもこれも」手を出したという印象は否めません。自分でも苦笑してしまうほどです。

「あれもこれも」のうちの一つは、『もじゃもじゃペーター』というドイツの絵本です。スープが嫌いだとだだをこねていたら、見る見るうちに痩せていって、5日目にはお墓に入ってしまう。親指をなめていたら、裁縫屋さんがやってきて、大きな鋏で指を切られてしまう。『もじゃペー』は、10編のそのような短い物語で構成されています。この強烈な〈しつけ〉の絵本は、一般的な教育の観念からみれば、よい子に読み聞かせる絵本としてはとてもお勧めできるような代物ではありません。

けれども、『もじゃペー』の魅力は、通常の教育観をはみ出した要素を含んでいる点にこそあるような気がします。また、そこから翻って、絵本に含まれたそれらの要素が、教育に関する私たちの常識に変更を迫り、新しい視点を提供してくれるのではないかと、密かに期待させるのです。さらに、その後数多く公刊された『もじゃペー』の類似本にまで視野を広げると、オリジナルが有していた重要な要素が時代とともにいかにして消失していったのか、ということが浮き彫りになります。こうしたことを説得的に記述するためには、おそらく人間学的な考察と近代批判的な考察の双方が必要となります。両者は、常に折り合いがよいというわけではありません。『もじゃペー』は、けれども、両者を円滑に繋いでくれる不思議な性質をもっています。ここにも、私がこの絵本に注目する理由があります。

『もじゃペー』に関心を寄せてから早くも10年以上が経ちました。いくつか論文を書きましたが、まだその全体像をまとめるという域には達していません。私自身の怠慢を除いたとしても、それなりの理由がいくつか思い当たります。一つは、考察対象の性質と考察を試みる者（つまり私）がもつ文体の性質とがうまく折り合いません。理由のもう一つは、読むたびに、絵本の見え方が変化してしまって、観察者の手をいとも簡単に観察される対象がするりと抜けてしまうことにあります。今も、この「やんちゃ坊主」と格闘しています。ちなみに、私にとって、〈しつけ〉とは、まずは子育て中の親として、日常的に四苦八苦している身近な問題にほかなりません。けれども、それだけでなく、いかにして他律による自律の達成は可能か、という近代教育の根本問題が濃縮された営みであるという点において、〈しつけ〉というテーマは重要な意味を帯びています。

ところで、最初にふれた「あれやこれや」についてです。ふらりふらりと対象を変えてきた考察はすべて、『もじゃペー』との格闘と同様に、実は、自律性へと他者を導くことが抱える近代教育の根本問題をめぐって（自律性を中心に問題を構成することの妥当性を吟味することも含めて）繰り広げられる考察の諸側面です。その点において、私なりの一貫性を保ってきたつもりです。「あれやこれや」の中身には、教育思想に関する古典の読み直しからルーマンのシステム理論的教育学の検討までが含まれます。「から」と「まで」の間には、追悼施設論、都市論、身体論、金融教育論、道徳教育論などが横たわっています。

教育哲学・思想史は、教育や人間形成の根本的な問題にこだわりつつ、さまざまな具体的な考察対象について言及することができ、そのかぎりにおいて、よい意味での雑学性を持ち合わせていると思います。そして、上述したような問題をめぐってコミュニケーションを交わすことができ、そのことに生き甲斐を感じているようなたくさんの仲間や同志に恵まれたジャンルでもあります。関心のある方は、どうぞ研究室に立ち寄ってみてください。

院生から

教育方法学講座　修士課程2年　大下卓司

私は現在、算数・数学教育について研究しています。研究を通じて、算数・数学教育は普遍的な側面を持つと共に、教育という特殊な文脈においてのみ理解できるという2つの相反する性質を併せ持つ点に魅力を感じるようになり、このテーマに至りました。その際、今日の教育のあり方を具体的に考え、教育現場に研究の成果を何かしら還元したいと感じ、教育方法学という分野を選びました。

これまで、学部時代には小学校の先生方の研修に、大学院に入学してからはフィールドである高倉小学校との共同研究にと、学校現場に関わる機会に恵まれてきました。こうした学校との関わりの中で、学校が抱える今日的な課題に向き合うには、たとえ回り道ではあっても、理論や歴史を対象とした基礎的な研究が重要であると考えるようになりました。

算数・数学教育の歴史は古く、日本では今日的な教科は明治時代になってからです。この歴史の中で、「近代化」や「現代化」といった様々な潮流の転換を経て現在に至ります。この間、学問としての系統に重きを置くか、子どもの経験や発達に重きを置くかといった論争が展開され、議論の成果をくみ取った多様な実践がされてきました。これらの実践には、今日現場の先生方が直面するような問題に対して、有効な示唆を与えてくれるものもあります。

昨今、教育問題はますます社会的な関心をあつめ、算数・数学教育では理数離れなどの問題が指摘されています。こうした問題に対して、場当たり的な対応ではなく、歴史に学び、将来を見据えた打開策が求められているのではないでしょうか。現在の私の力では到底及びませんが、研鑽をつみ、このような問題の解決の一助となるような研究に取り組んでいきたい所存です。

社会人研究生から

比較教育政策学講座　研究生　小木　充

私は、静岡県の県立高校の現職教員です。静岡県教育委員会が長年実施してまいりました「大学等研究機関派遣研修」によって、本年度4月より教育学研究科教育行政学研究室の研究生として勉強させていただいております。昨秋以来吹き荒れたリーマン・ショックは、晩秋には、本県高校求人にも本格的な影響を与えることとなり、キャリア教育の重要性を改めて認識させられました。今の高校生にとって必要な職業観・就業観とはいったい何か。変動的な産業構造にあって子どもたちが生涯を生き抜く端緒の形成を模索したい、といった課題意識を持つようになりました。

一方、高校改革・多様化政策を現実のものとして結実させたのが第14期中央教育審議会であり、この答申のパイオニア的役割を背負うため、総合学科高校の創設へと至ることとなります。総合学科は、多様なニーズに応えるための幅広い選択科目の確保と将来を通した就業観の醸成といった目的を掲げております。以降16年が経緯し、財政難・少子化に伴う各自治体の再編整備計画に強く影響を受け、様々な課題を抱えながらも今なお総合学科は増え続けております。

本年7月には「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方（中央教育審議会キャリア教育・職業教育特別部会）」として、各学校段階におけるキャリア教育のあり方が政策テーマとして検討されております。特に高校教育においては普通科教育におけるキャリア教育について注視している向きもあります。そこで、総合学科の課題を踏まえた上で、総合学科の進取的なキャリア教育の取り組みを調査し、現代高校生にとって必要な就業観と培う教育実践の在り方を研究テーマに据えました。

思わぬ研修の機会を得た京都での生活は、正直なところ戸惑いも多いスタートでした。しかし、丁寧かつ熱心な先生方、官僚や産業界といった外部講師の方々、そして一回りも違う学生たちからも多くの知見を得られました。また、フィールド調査からは、同じ高校教育にあっても、多様な教育活動が展開されており、私の常識がいかに偏狭なものであったのかを痛感させられました。高校教員の多くは、目前の教育実践に追われる毎日であり、その多忙さにあっても明日使える技術の獲得は怠りません。

一方で、外部との関わりが少ないためか、高校教育が抱える課題や社会の要求する教育への期待といったものに鈍感な環境にあります。私自身の研修を通して、多くの教員がじっくりと学びなおしができる場の必要性も感じております。京都での1年は、この上なく大変恵まれた機会となりました。京都大学での学びは、私自身の教育実践の糧として、あるいは静岡県の教育に対して還元できればと考えております。

グローバルCOE：事業仕分けと中間評価

教育認知心理学講座　教授、拠点リーダー　子安増生

政権交代でわが国の文教政策、とりわけ高等教育政策が今後どのように展開していくのか、いささか不透明な状況が続いています。その中で、行政刷新会議のいわゆる事業仕分けが行われ、11月25日にはグローバルCOEもその俎上にのぼせられ、事業経費全体の「三分の一縮減」が言い渡されました。実際の予算が決まるまでにはまだ曲折があるものの、この三分の一縮減案は肯んじがたいものです。そこで、本拠点としてだけでなく、京大グローバルCOEの全13拠点として、そして全国のグローバルCOE有志連合として、本事業に対する理解を深めていただくための声明を文部科学省に手渡したり、同省の意見投稿欄にメイルで送付したりするなどの活動を行いました。

事業仕分けの5日後の11月30日、今度は朗報が届きました。昨年から半年がかりで準備し、本年6月30日に受けた中間評価の結果が、ちょうど5か月後にようやく発表されました。全体的評価（総括評価）は、「現行の努力を継続することによって、当初目的を達成することが可能と判断される」というもので、本拠点が取り組んできた事業の意義が認められました。心理学と教育学の有機的連携をさらに深めていくと共に、人材育成のための各種事業を継続していくことが期待されております。中間評価の内容の詳細は、下記に公開されていますのでご覧ください。

http://www.jsps.go.jp/j-globalcoe/data/chukan_kekka/d/D07.pdf

改めて繰り返すまでもなく、グローバルCOEは教育研究の国際化の推進とそれを支える有為な人材の育成にとって、現に重要な役割を果たしています。この2年間だけでも、大学院生の外国語論文掲載数や国際学会発表数は大きく伸びました。それ以外にも、目に見えないものも含め、大きな成果があがっています。教育学研究科各位におかれましても、引き続きのご協力とご支援を本拠点に賜りますよう、なにとぞよろしくお願いします。

大学院教育改革支援プログラム（大学院GP）から

臨床心理実践学講座　教授　角野善宏

平成19年度より開始された大学院教育改革支援プログラム（大学院GP「臨床の知」を創出する質的に高度な人材養成―京大型臨床の知プログラム）もついに最終年度を迎えました。現在は今年度の活動を継続してゆくと同時に、これまでの成果を総括するに当たって、「大学院生主体研究開発コロキアム」、講演会企画や学会発表支援を中心とする「アウトリーチ」、シンポジウムの開催などを通じた国際交流を中心とする「国際」というそれぞれのセクションからの報告書に加え、"「臨床の知」を創出する質的に高度な人材養成"という本プログラムのテーマをめぐって、より包括的にこれまでの活動成果を振り返る全体的な成果報告書の作成を進めています。また『臨床の知―臨床心理学と教育人間学からの問い』（創元社）と題した書籍の出版に向けても準備を進めており、そこでは本研究科の臨床心理学、臨床教育学をはじめ、教育社会学、教育認知心理学というそれぞれに異なる専門的立場の教員によって「臨床の知」をめぐる論考が展開されており、大変興味深いものになっています。

これまで、当プログラムでは大学院生が主体的に創造的な研究を遂行することとその成果を広く発信する能力を高めることを目指し、大学院生による研究開発コロキアムの支援、国内外で開催される学会での発表や外国語論文投稿支援などに力を入れるとともに、さまざまな講演会や研究会の企画、外国にて開催されるセミナー等に参加し外国語で研究発表をおこなう国際交流企画などを通じて大学院生が貴重な出会いを体験する機会を設けてきました。「臨床の知」は単純な How to によって学ぶことのできるものではありません。また必ずしも直接的に短時間で研究成果が出せるようなものでもないのかもしれません。しかしこの3年間の間の体験を通じて多くの大学院生がそれぞれに刺激を受け、現在そしてこれからの長く続く研究活動や臨床実践に生かしてくれることを心より願っています。

教育実践コラボレーション・センターから

コラボレーション・センター関連　助教　赤沢真世

教育実践コラボレーション・センターは、京都大学大学院教育学研究科「子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究推進事業」として2007年4月に設立されました。学校・教育現場から投げかけられた具体的・複合的な問題に対して、固有の研究分野からの関わりだけではなく、研究分野の領域の枠を超えたより有機的な働きかけを行えるよう、教育学研究科としての組織的な対応をコーディネートすることを目的としています。

本センターは、「学校教育改善ユニット」「新しい教育関係ユニット」「教育空間創造ユニット」の3つのユニットを活動の柱として、教員と大学院生が協同して活動を進めてきています。「学校教育改善ユニット」では、京都市立高倉小学校や寝屋川市立田井小学校などと連携し、大学院生が中心となって日々の授業見学や指導案検討を行うなど、共同的な授業改善の取り組みを継続的に進めています。「新しい教育関係ユニット」では、京都市立洛風中学校をはじめ、全国の新しい教育関係を生みだす試みを行う学校との関わりを進めてきています。また「心理臨床領域」の教員・院生だけではなく、臨床教育学や教育方法学の教員も参加する機会を持つなど、研究領域を超えた試みが行われています。「教育空間創造ユニット」では、南山城村野殿童仙房地域と「生涯学習推進委員会」を立ち上げて連携を進め、地域の人々と大学教員・大学院生がフィールドワークを通じて共同の学びの空間をつくることを推進しています。とりわけ今年度は、「第4回風と雲の広場」や座談会「学ぶ原理〜リョウシさんから見た森・里・海のつながり」のような取り組みを行いました。

また、国際関係では、センター企画として7月31日（金）に公開シンポジウム「日韓の教育改革の行方」を開催しました。昨年度シンポジウム「日中韓の教育課程・教育評価改革」でもご報告いただいたソウル大学の白淳根氏、そして文部科学省研究振興局局長の磯田文雄氏、本学研究科の西岡加名恵准教授にご登壇いただき、日韓の教育改革を担う第一人者の先生方から直接ご意見を頂く貴重な機会となりました。約70名に及んだ参加者からも多数の質問が寄せられ、盛況となりました。

設立から3年目にあたる今年度の大きな特徴は、研究分野の枠を超え、同一の課題に対して複数の研究分野から検討を行う機会を積極的に設定したことが挙げられます。2009年11月7日（土）には、センター主催シンポジウム「学校を問い直す」を開催いたしました。このシンポジウムでは、京都市立醍醐西小学校、京都市立洛風中学校、野殿童仙房地域の方3者から、コラボレーション・センターの柱である「学力・こころ・地域」の3つの視点からそれぞれの立場で直面している課題や取り組みの工夫・可能性についてお話頂きました。ご報告後には、参加した教員や院生などが率直に意見を交換できる交流会を設定し、異なったフィールドであっても、直面している課題の深層には共通点が見られることや、これからの可能性について議論が深められました。学校・教育現場と大学の協同・協力の取り組みを進めることは、そう簡単なことではありません。そのなかで、今回このように各ユニットやフィールドを超えて、大学教員・大学院生が交流すること、そしてそれぞれの学校・教育現場同士も交流する機会を設定したことには、大きな意義があったと考えます。今後はこうした機会を積極的に推進していくことが望まれます。

今年度はセンター3年目の中間年度であります。本センターの目的や意義を改めて確認し、大学教員・大学院生、そして学校・教育現場との有機的な連携をさらに発展させていきたいと思っております。今後とも、教育実践コラボレーション・センターの活動にご支援・ご指導を賜りますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

臨床教育実践研究センターから

臨床実践指導学講座　教授、心理教育相談室室長　皆藤　章

臨床教育実践研究センターが総合研究1号館（吉田キャンパス北西角）に移転して、早いもので1年あまりになろうとしています。移転というのは相談室にとってはとりわけ大きな意味をもっていました。といいますのも、来談される市民の方々にとっては物理的環境が変わりますので、新しい環境に馴染んでいただくのにはそれなりの時間がかかるからです。相談室では、スタッフ一同が相談しやすい雰囲気作りを心がけてきましたが、幸いにもこれまで大きな問題はありませんでした。また、昨今は新型インフルエンザの流行に伴い、相談室においても慎重に対応して参りました。おかげさまで、現在までのところ、閉室などの措置をとることなく相談室は運営されています。

ところで、本センターでは現代人が抱えるさまざまな心理的テーマに対して、研究と実践を行っています。実践の中心は相談室です。大学附属の心理教育相談室としては全国一の相談件数・相談時間の実績があります。この実績は、おそらく、国立大学として初めて、文部省（現:文部科学省）の許可のもとに有料の相談室として発足した1980年から続いていると思います。そうした実践から得られた「臨床の知」を活かすべく、大学院生、教員はじめ相談室スタッフは研鑽を積んでいます。「臨床心理士」資格取得・資格更新もそのひとつです。本研究科の心理臨床学領域は、（財）日本臨床心理士資格認定協会による第1種指定校として認可されており、これまで日本の心理臨床の中心となる人材を数多く輩出してきました。また、研究の領域では、『臨床教育実践研究センター紀要』を毎年刊行し、現代人が抱える心理的テーマに対して、人間に関わるさまざまな専門領域と交流しながら積極的な発信を行っています。その他、公開講座やリカレント教育講座などの事業も展開しています。

現代はストレス時代と言われるように、ごく通常の生活を送っているだけでもさまざまな心理的ストレスに見舞われることが多くあります。自然災害や病気などといった突然の生活上の異変は何も特別なことではなく、われわれ現代人にとって身近なこととして体験されています。こうした現代を創造的に生きていくために本センター、心理教育相談室は微力ながらこころを傾けています。

事務室から

教務掛　佐々江万由美

教育学部は今年で60周年を迎え、春には記念式典が行われました。この喜ばしいイベントを終えた後、耐震工事のための移転・引越しがあり、また来年には、元の古巣へ戻るための引越し作業が待っていて、21年度はほんとうに慌ただしい年となっています。

教務掛の仮事務室は授業教室の並びに配置され、学生の皆さんとは以前よりお顔を合わす機会が増えました。この秋の11月祭では、準備から後片づけまでを間近で見ることになり、学年の枠を越えて一致団結したチームワークの良さ、小規模な学部ならではの良さを実感することができました。これは移転がなければ目にしなかった光景で、良いこともあるものです。

学生数が少ない利点で、これまではほとんどの方のお名前を覚えることができていました、ところが勤務して数十年も経ちますと記憶力も乏しくなり、最近では院生の方まで時折度忘れする始末で、なんとも情けないばかりです。でもそこは年の功、信頼感・安心感を持っていただけるような窓口応対でカバーしたいと思っています。事務的な立場から時には厳しく注意しなければならない事もありますが、これも社会人となられた時のことを思えばこその『親心』と受け取っていただけると幸いです。いつか昔を振り返られた時、学生時代が良き思い出として残るよう、陰ながら少しでもそのお役に立てればと思っております。

最後に教務掛からのお願いです。KURASISという便利なシステムができ、色々な情報が来学せずともインターネットで得られるようになってきました、しかしながら未だ全てのことが網羅されているわけではありません、必ずご自分の目で掲示も併せて確認するよう心がけて下さい。

図書室から

専門職員（図書掛長）　沼澤　博

ただいま耐震工事中です。

近衛にある職員会館（大学文書館）の1階をお借りして、先生方に選書いただいた教育学部の学生・院生に特に必要な図書3万8千冊ほどを配架して利用に供していますが、利用申込を受け、それを職員が出納してきて貸し出すというシステムを採用せざるを得なかったため、利用者の方々には多大なご迷惑をおかけしています。それでも1日平均の貸出冊数は、9月＝16.7冊、10月＝20.2冊、11月＝23.6冊と少しずつ増加しており、不便であるにもかかわらずこれだけの利用をいただいているのは、ありがたい限りです。このような状況にあって他部局の方の利用が存外多いのは、当図書室の蔵書構成のなせる業といえるでしょう。

7月から一旦休室して、9月から出納式で開室したのですが、もう戻る準備を始めています。現在のところでは1月15日まで開室して、それ以後閉室、再開は4月を予定しています。といっても、再開と同時に利用いただける図書は、職員会館に配架して利用に供していた図書のみで、梱包して倉庫に保管されている図書は順次整理して利用に供していきますが、すべての図書が利用可能になるのは6月ごろになると思われます。まだまだご迷惑をおかけしますが、ご容赦ください。

閑話休題、耐震工事に伴い、図書室の利用も大きく変わります。いちばん大きな変化は、附属図書館と同様にカバンの持込が可能になることでしょう。これまでは書庫に入るためにはロッカーに荷物を入れなければならないとか、閲覧室と書庫が離れすぎていて本がすぐには見られないとか、いろいろと不便な思いをさせてきましたが、そういう不便から開放されることになります。つまり、閲覧室が書庫の中に設置されるということで、閲覧しながら即図書にアクセスできるという形態になります。

それから、書庫がかなり広くなります。これまでは申込を受けて職員が出納してきた「地下閉架」の図書も、ごく普通にアクセスし利用していただけるようになります。「別棟閉架」図書は、当面はこれまでどおりに出納式で行わざるを得ませんが、いずれは書庫に移す予定です。

ただ、すべての書架が集密書架になるためブラウジングにはいささか不便になりますが、直接アクセスできる図書が増えたということで、その点はご理解ください。

留学生から

教育学講座　博士後期課程3年　ヤユツ・ナパイ

私は「台湾原住民族」という先住民族の出身で、2003年の秋に原住民学生向けの奨学金をもらって、京都大学に入学しもう7年目になります。私は幼児園から台湾の中央山脈の奥山にある村を離れて、原住民族の文化や言語を忘れて漢民族の社会にとけ込んでいました。大学に入ってから、ほかの原住民学生と出会って、原住民族の視野から原住民族におけるさまざまな社会問題を見直し始めました。そのため、原住民社会を何か変えよう、という大志を抱いて、京都大学に入学しました。教育学に対してあまり知識がなかった私は指導教官の先生方や研究室の先輩たちにいろいろご迷惑を掛けながら、細かいご指導やお世話もいただき感謝しています。

台湾原住民族は、日本人や漢民族などの外来政権による統治を経て、百年あまりの間に、政治や経済、宗教、文化などのあらゆる面で統治民族への同化が進み、部落における伝統文化の伝承が断絶するという危機に直面しています。最も根本的な問題は、商品経済の浸透により従来の部落のあり方では生計を立てられなくなり、多くの原住民族が仕事を求めて自らの居住する部落を捨てざるをえないことであり、そのことを子どもや青年も認識しているために自らの言語や文化を学ぼうとする意欲を失ってしまうことです。原住民族の言語・文化の教育が効果を上げるためには、生業の安定化を含めて部落での生活全体の立て直しが必要だと思います。私の研究では、その生業のひとつとして着目される観光事業を中心として、その発展過程ではどのように原住民族の伝統文化を含める教育事業を結びつくことを考察します。

博士課程はもうそろそろ4年目が終わります。今年こそ博論が完成できるように努力し、いつか来日当時に抱いた素朴な夢を叶えるように頑張ります。

諸記録

◇平成22年度入試結果

・教育学部

日程等	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
前期日程文系	50				
前期日程理系	20				
第3年次編入学	10	18	18	6	

・教育学研究科

課程等			募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
修士課程	研究者養成コース	教育科学専攻	18				
		臨床教育学専攻	14				
	教育科学専攻(専修コース)		10	37	37	11	
	臨床教育学専攻(第2種)		若干名	0	0	0	
博士後期課程臨床教育学専攻(臨床実践指導者養成コース)			4	6	6	2	
博士後期課程編入学			若干名				

(　　)内の数は外国人留学生で内数

◇平成21年度学位授与件数

(H21.10.1現在)

学位名等		授与者数
学士	教育科学科	
修士	教育科学専攻	
	臨床教育学専攻	
博士	課程博士	4
	論文博士	0

◇人事異動（H21.6.2～H21.12.1）

平成21年7月1日付け

[redacted]

平成21年8月31日付け

[redacted]

平成21年9月30日付け

[redacted]

[redacted]

平成21年10月1日付け

山名　　淳　准教授　　（教育学講座）　　採用

東京学芸大学大学院教育学研究科准教授から

平成21年10月31日付け

[redacted]

◇寄附金受入

寄附金の名称	寄　附　目　的	寄　附　者	研究担当者
「京都大学教育学部60年史」の刊行助成	「京都大学教育学部60年史」の刊行助成	京都大学教育学部同窓会	矢野　智司　教授
臨床心理士が備えるべき専門義務	「臨床心理士養成大学院合同事例検討会における相互研修の検討」に関する研究助成	日本臨床心理士養成大学院協議会	髙橋　靖恵　准教授

◇科学研究費補助金

２１年度

研究種目	研　　究　　題　　目	研究担当者
基盤研究(B)一般	児童青年の対人関係障害に対する多次元的アセスメントによる理解と援助	髙橋　靖恵

◇オープンキャンパス2009開催

平成２１年８月６日(木)、７日(金)の両日、「京都大学オープンキャンパス2009」が開催された。

本学部においては、８月６日(木)12時30分から実施し、369名の参加者があった。

当日は、矢野智司学部長の歓迎の挨拶、辻本雅史教授の模擬授業、授業担当教員との意見交換、各系の説明と質疑応答が行われ、会場は参加者の熱気にあふれた。また、終日、学生相談員が個別相談にあたり、参加者からは教育学部ではどんな勉強をするのか等の相談が寄せられた。

諸　報

◆新任教員・事務員紹介（「　」内は本人の抱負）

[redacted]

～ 編 集 後 記 ～

News Letter 19号をお届けいたします。温暖化の傾向によるものでしょうか、夏が長く、風情のある春、秋は短くなってしまったように感じられます。冬が訪れ、2009年もあっと言う間に通り過ぎようとしております。今年を象徴する一文字は「新」と発表されました。政治やウィルスや多くの開発商品など「新」しいものに囲まれる一年であったようです。

研究科本館も耐震工事の真っ最中で、来春には新しい建物となります。しかし何事も新しいものを生み出していくためには、日々の努力や苦しみも伴います。本研究科も、教職員と学生共々協力し合い、新年がより一層充実した年になるよう努力していきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。（YT）

京都大学教育学研究科・教育学部広報委員会

委員長　杉本　均　教授（比較教育政策講座）
委　員　矢野　智司　教授（教育学研究科長・教育学部長）
委　員　西平　直　教授（臨床教育学講座）
委　員　髙橋　靖恵　准教授（臨床実践指導学講座）
委　員　吉井　晃　事務長
委　員　河合　明美　専門職員（総務掛長）
委　員　西本　幸江　専門職員（教務掛長）

事務担当

教育学研究科・教育学部総務掛
TEL 075（753）3003